慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「近代化」とカウンセリング
Sub Title	The modernization and the counseling
Author	岡山, 超(Okayama, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1964
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.4 (1964.) ,p.63- 68
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 日本の近代化 : 論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000004-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「近代化」とカウンセリング

The Modernization and the Counseling

岡　山　　超

Takashi Okayama

社会学的事象とカウンセリング

「近代化」という概念で示される一つの社会学的問題とカウンセリングという特殊な営みとの関係を考えて見ることが，私に与えられた課題である。しかしながら，カウンセリングは，しばしば強調されるように問題よりも人 (people rather than problem)」，すなわち個人が当面している「問題」そのものよりは，問題に直面している「人間」に重点的に関与する過程である。しかもその関与の仕方は，常に「個別化され (individualized)」「人格化された (personalized)」仕方においてであり，このことは，いかなる問題であっても，それをクライエント（来談者 client）の個人的な且つ私的な問題として取り扱うということを意味する。

すなわち，カウンセリングはもっぱら特定のクライエントの内的世界に関与する営みであって，クライエントをとりまく外的世界の事象にカウンセラーが直接かかわりを持つということは起りえない。また，カウンセリング場面では，特定の問題が一般化されたかたちで取り上げられるということも原則としてあり得ない。もしあるとすれば，それは「情報提供 (information giving) というかたちにおいてであろう。それゆえ，カウンセラーがカウンセリング活動の中で「近代化」と呼ばれるような社会学的課題に接触を持つことがあるとしても，それはあくまでも個人的なレベルにおいてであり，クライエントの生活空間内の事象として，あるいはクライエントのパースナリティーの問題として接触するに止まるであろう。この点は社会学的事象とカウンセリングとを結びつける仕事を困難ならしめる第一の原因である。

一方，カウンセラーは，個人の内的世界にその興味を集中するあまりとかく近視眼的になり，自分達の仕事を社会学的視野から眺めるということを忘れがちになることもまた否めない。このことはカウンセリングが心理学に対してはきわめて親和的であり，またそこから多くの知見を得ているにもかかわらず，社会学に対してはきわめて疎遠であり相互にほとんど利益し合うことがないという事実を見ても，容易に想像しうるところである。この点に「近代化」というような社会学的問題とカウンセリングとを結びつける仕事を困難にする第二の原因である。

しかしながら，カウンセリングはそれ自体社会の中で進行する過程であり，カウンセラーもまたクライエントも共に社会の中の人である。それゆえ，カウンセリング過程におけるいかなる発言も反応も社会的文脈をはなれては相互にその真の意味もそのもつ価値も理解し得ないはずである。たとえば，クライエントは自分が「何かから疎外されている」結果として，その孤独や不安を訴えるかも知れない。カウンセラーは，ただひたすらクライエントの感情をそのままに受容 (accept) してゆくべきであるとしても，カウンセラーがこの不安を上のような社会的文脈から受けとめることをしなかったとすれば，クライエントはおそらく「自分は何も理解されなかった」と感ずるであろう。

クライエントの反応は，それを社会の中の人間の反応として受け止め理解するとき，はじめて人間的意味を持つものであり，それゆえカウンセリング過程そのものも社会的視野を離れては空虚なものとなってしまうであろう。この点からは，カウンセリングは個人の内的世界に

限定的に関与する過程であったとしても社会学的事象から全く無縁であることはできない。それは一つ一つのカウンセリング場面に影響を及ぼすと同時に，ひいてはカウンセリング理論や技術にさえ影響するであろう。

一方，カウンセリングは常にクライエントの「今」に関与する過程である。しかしこのことは，カウンセリングが単なる status quo の用具であることを意味しない。カウンセリングは何らかの価値を問題にし，クライエントをそれに向わしめる行為である。この過程は多かれ少なかれクライエントの人格を変容し，彼の社会に対する態度や行動に長期的な影響を与えるであろう。このことは，カウンセリングがクライエントを通じて，社会に対して何かをなし得ることを意味する。それは特定の社会学的事象の進行に対して，奉仕することもできるし，また抵抗することもできる。

カウンセリングはその性質上「近代化」というような特定の社会学的事象に直接関与することはない。しかしカウンセリングは，クライエントとの私的な関係を通じて，「近代化」というような社会学的事象に影響され得るし，また，それに影響を与えうると考えられる。以下この視点から，カウンセリングが「近代化」の進行の中で何をなしたか，また何をなすべきかについて考察をすすめて見たい。

「近代化」の意味

さてカウンセリングと「近代化」の関係を論ずるに当って，「近代化」の概念をどのように把えるかが問題になろう。しかしながら，ここでは社会学的理論の構成や社会的事象の解明を目的とした「道具」としてこの概念を使用するわけではない。要は「近代化」という概念で一般的に示されているような，一定の方向を持った且つ世界的に共通した特定の社会的変化の内容を明らかにすれば足りると考える。

一般に「近代化」ということばが用いられるとき，それはそれ以前の封建主義的社会との対比において，それとは異質的な方向への歴史的・社会的変化を指しているようである。

川島の規定によれば，その内容は「広汎な人々の解放に向っての急速且つ深酷な社会的変化」として把えられる。そしてより具体的には，経済的側面においては「無生物的エネルギーの管理（制禦，適用）による労働生産力の増大とそれに伴う相互依存関係の増大，および広汎な人々への公正な分配」また社会的側面からは「個人による行動選択の拡大，および広汎な人々の相互作用の可能性」また政治的には「個人に対する力の支配の国家独占，広汎な人々の何らかの政治参加と普遍主義の貫徹」そして思想・文化の側面では「合理主義の貫徹」への傾向として示される。

しかしこれらの社会的変動が，深酷な人間の問題として表面化し始めたのは今世紀に入ってからであろう。それは資本主義の発展が新しい段階，すなわち産業資本主義から独専資本主義の段階に突入し，資本主義生産のもつ諸特徴がより一層明確化したとき起り始める。そしてこの段階において，資本主義労働すなわち賃労働形態の純化，それを推進する諸機構・諸構造の急速な発展，さらにそれに基く集団および文化の変容が，いわゆる人間の疎外を引き起し，人間をして非人間化――しばしば人間の原子化，ロボット化，画一化，商品化などのことばで表現される――の方向へと押しやることになったことについては，ここで改めて詳述する必要はあるまい。

「近代化」とカウンセリング

さてこのような「近代化」の進行の中でカウンセリングは何をなしたであろうか。「近代化」の進行に伴い，近代社会がその構造的矛盾をより明確に示し始めるのは，前述のように1900年代になってからである。ところが，カウンセリングは正にこの時点でその営みを開始する。カウンセリングは，しばしばその起源を職業指導運動に求められる。これはアメリカにおいて青少年の卒業後の職業適応を改善するために，博愛主義者たちによって始められた一つの運動であると言われる。そして今世紀の始めに，Persons, F. がボストンでこの仕事を開始し，且つこれにある程度の体系化を試みて以来，職業指導は次第にその専門的な領域を確立し，職業指導のためのカウンセラーの養成，学校教育の中へのカウンセリングの導入が次々とすすめられることになった。そして1930年代には，これらの専門家たちをして「いまや指導は可能になった」と言わしめるまでに発展することになる。

しかし職業指導にこのような自信を与えたものは，実はちょうどこの頃に盛んになり始めた心理測定運動である。Persons は職業指導を，職業へのオリエンテーション，個人の分析，カウンセリングを含む過程であるとしているが，彼がこの仕事に従事し始めた当初には，残念ながらこの第二，第三の側面を支えるに足る十分な理論と技術を欠いていた。しかるに，正に時を同じくしてフランスでは Binet, A. が，その有名な知能検査の作成に成功していたのである。この成果はまもなくアメリカに

伝えられ，そこで思いがけない急速な発展を遂げ，心理測定運動または教育測定運動と呼ばれるものの端初を開くことになったのである。心理測定の理論と技術のこのような急速な進歩は，職業指導の第二，第三の側面を著しく強化することとなる。かくして職業指導家達をして前述のことばを吐かしめる結果となったのである。

このような職業指導の発展と盛行は，「近代化」の進行と無縁ではない。職業適応への援助を必要ならしめたものは，いうまでもなく「近代化」に伴う新しい生産技術の進歩と，合理化の進行による分業化の傾向の増大であり，他方人間の解放に伴う職業選択の自由の拡大である。Mills, C. W. によれば，19世紀の初期においては，自営企業家の数は有業総人口の 4/5 であったものが，1870年代にはこれが 1/3 となり，1940年にはわずかに 1/5 にしか過ぎなくなった。それが今日 (1951) ではアメリカの全企業のわずか 1% を占めるに過ぎない巨大企業が，今日の産業に従事する全人口の50%以上の人間を雇用していると述べている。

職業指導は，その発展の当初においては，確かに個人の利益と幸福の増大に奉仕するという博愛的精神を基底としている。そしてその精神は今日においてもなお生きている。この限りにおいては，職業指導は人間主義に立脚した営みであると言ってよかろう。職業指導が個人の自己発見を助け，社会的洞察を深め，それゆえに彼をしてより効果的に自己自身を生かしめることに貢献していることもまた確かであろう。

しかし，「いまや指導は可能になった」ということばほど人間の操作を思わしめることばはない。青少年の利益と幸福の増進という博愛的構えを以って，適応援助という名のもとに，複雑化する生産機構や組織の中に人間をあてはめることが初期の職業指導の主要な仕事であったとすれば，それは正に人間の「原子化」や「ロボット化」への援助である。適性の発見と適職へのあてはめは，けっきょく自己をより高く売りつけようとするパースナリティーの「商品化」に貢献する。

さらに心理測定の盛行に伴う職業指導の科学的武装は，パースナリティーや適応の問題を量に還元して，指導過程をより合理化しようとする試みであるが，これはともすれば人間の機械化と抽象化を促進し，人間の非人間化に拍車をかける危険をはらんでいる。Fromm, E. が指摘するように，すべてのものが——人間すらも——量化され，抽象化されることが，資本主義の基本的経済的特質であるとすれば，職業指導もまたこのような影響を受けざるを得なかったし，またこれに奉仕せざるを得なかったことを示している。

かくして初期のカウンセリングは，人間に奉仕しながら，人間を忘れ去ることになった。このような傾きに大きな反省を与え，カウンセリングに人間をとりもどさせたものは，同じく当時盛り上ってきた心理療法への関心の増大である。とくに 1942 年に発表された Rogers, C. の "Counceling and Psychotherapy" は両者の結合に決定的な影響を与えたと言ってよい。この書は，当時カウンセリングに従事する人々に，彼らが関与しているのは実は「問題より人」，すなわち援助を要するのは単に職業や結婚や性格上の問題の解決ではなくて，適応しようとする個人自体である，ということに気ずかせ，カウンセリングを，人間を人間として扱い，あらゆる種類の適応問題について援助を与えるプロセスとして変貌させて行った。

この，「問題から人へ」，の興味の転換は，必然的にカウンセリング過程のあり方をも変化させる。同じ問題も人それぞれにその受けとり方はちがうであろう。またそれへのかかわり方も個人によって異るであろう。かくしてカウンセリングの援助のあり方は，当然個別化されたものであらねばならなくなる。一方個の尊重は必然的に行動主体としての個の自由と責任との承認を意味する。かくして，カウンセリングは Williamson, E. G. によって「社会的顧慮を欠かない自己理解と自己指示 (self-direction) を達成し，改善してゆく技能を発達させるための，個別化され (individualized)，人格化された (personalized)，許容的な助力 (permissive assistance)」の過程であると定義されることになる。

このことは，一見人間主義の復活であるかのように考えられる。しかし問題は，このような過程がいかなる価値を目指して営まれるかという点にある。たとえば，上の定義において，Williamson がとくにつけ加えることを忘れなかった「社会的顧慮を欠かない」というフレーズに注目する必要がある。Williamson を始め，一般に「指示派 (directive school)」または「折衷派 (eclectic school)」と呼ばれている人々にとっては，カウンセリングは個人をして「社会化」または「社会的良適応」に導くための援助のプロセスとして受けとられている。

たとえば Williamson にとっては，Rogers が主張するようないわゆる「非指示的 (non-directive)」な態度は，カウンセラーの関心を単に「個人の成長のための成長」ということに向けさせ，「時には他の個人から社会的に孤立させるおそれがある」ように見えるのである。そしてカウンセリングは，単に個人が成長のために成長

をはかることを目指すのではなくて，「個人がその中で成長を遂げる社会的構造の中で成長する」することを目指すべきだと考える。このようなカウンセリングの目標は，一方では「人的資源の最大限の利用と保存という社会的目的」から設定されるものであり，他方では社会の中に自己を投入し，社会との交渉を積極化しうるような人間が健全であり且つ幸福であるという仮説から導き出されるものである。

このような立場からは，カウンセリングは，最も一般的に承認されるような社会的標準にクライエントの価値観や態度を同調せしめ，何事にもあれ社会の現在的状況の中に積極的に自己を投入することのできるよう援助を与える過程であると言いうる。このことは，カウンセリングが，個別化され，人格化された援助を強調しながら，実は個人をしてより一層社会的な平均値に近づかしめることを目指していると言いうる。カウンセリングは人間をとりもどしたと言われながら，現代社会の今一つの特質である人間の「平均化」と「画一化」に助力する結果となるのである。Fromm の言葉をかりれば，それは「同調という匿名の権威」，「目に見えない疎外された権威」へのカウンセリングの屈服を意味する。

ひとつのケース

Williamson のいうように，社会の現在的状況の中に自己を同調せしめることが，果して人間にとって真に健康で幸福な状態なのであろうか。ここで一人の人間の現代における苦悩の様相を，ケースの中に求めて見ることも無駄ではあるまい。そして，そのような人間に対して，カウンセリングがどのようにあるべきかを考えて見たいと思う。そこで友田不二男氏のカウンセリング録音テープの中から，学生相談のケースをひとつ取り上げさせていただき，それを中心に考察をすすめて見よう。

K大学の4年生になるこの男子のクライエントは，第一回の面接で次のようなことを訴える。すなわち，自分は「学問のために」この大学に入ったのではなくて「いわゆる一流大学というネーム・バリューにあこがれて」入学して来たこと。そして今まで四年間卒業のための単位をそろえることに追われていて「気がついて見たら，本当に自分のための学問など何一つやっていなかった」。そして自分のやった学問など「まあひとつのアクセサリーみたいなものだ」と考える。そして「そんな自分では，世の中に出ても全く役に立たない」と考え，せっかくきまりかけた就職を断ってしまう。もっと有能な人物がいるのに自分が入社しては会社に迷惑をかけると考えたからである。

一方彼は大学生活四年間の交友についても「本当に友達のためになって真剣になってものを考えるってことをしてやらなかった」ような気がする。友達との関係など，けっきょくは「いい言葉じゃないが，バカし合いみたいな」関係だった。「コンパなどのとき，友達とバカさわぎ」をしては見るものの，その後で「大さわぎ，バカさわぎめいたことをした以上に，反動がきて」白々しい孤独におそわれる。彼にとっては，けっきょく「社会全体もそのような感じ」なのだ。

われわれはここに Fromm のいわゆる「生産的構え」を喪失し，「市場的構え」を以って大学に入学してきた現代の学生の一例を見ることができる。かくして，本来目的としてあるべき学問が，手段と化してしまったとき，学問は彼との結びつきを失い，単なるアクセサリーと化してしまう。そして大学生活の中核となるべき学問からこのように疎外されてしまったとき，本来それを中心としてとり結ばるべき学友との関係は，その類的結合の基礎を失うことになる。彼はこうして友人からも疎外される。

しかしながら，このような状況の中にあっても，彼はなお次のように訴える。

「……友達なんかにも，大分いわれたんですけど，〝君のような考え方だったら，ほんとに，なんにもやっていけない〟って。〝世の中なんていうのは，ほんとに――あき，あきらめ，まあ，あきらめと，そのオ，世の中に適合するような妥協性が必要だ〟とかなんとかいわれるんです。大分いわれるんですけど，〝そういう考えでいったら，なんにもできない〟って。自分でもそう思うんですけど，家に帰って，ぼく自分一人で考えてみますと，なにか割り切れない，割り切れない方へ，いっちゃうんです」

そしてさらにそのあとではこうも訴える。

「……そりゃ，そのそりゃああの，その，そのまんまでも，ズーッとまあ，社会を渡るのは一つの要領だってこと，よく友だちなんかいいますけど，いわれるんですけで，ぼくは，まあ，要領ってことも，一つの大切なことかもしれませんけど，それだけでは，ぼく，なんか，恐ろしいような気がしてくるんです。……とにかく自分ってものを，そのオ，まあ一つの信念，自分っていうものを，そのオ，社会を自分に適合させていくぐらいの自信を持ってないと仕方がないと思うんです。自分を無にして，ただ社会に適合してゆくんだったらなんにもならないという気がするんです。……」

われわれはここに，学問からも，学生生活からも，社会からも疎外された一人の学生がなお自己の譲渡に対して示す必死の抵抗の姿を見ることができる。自己を売り渡すことによって，同調の安定を求めるか，どこまでも自己自身を生きることによって自己恢復の喜びを得るか，彼はその分岐点に立たされて，カウンセリングにその解決を求めて来ているのである。しかし，第四回目の面接においては，彼はけっきょく次のように傾いてゆく。

「一人よがりの考えはこう陥ってしまうことはあの，非常に危険だと思うんですけど，けっきょく――自分の，勉強なり，まあすべての生活全般に渡ってその，もっと自分自身を中心にしてその生活っていいますか，行動をしてもいいんじゃないかなあって気がするんです。その，自分がその，自分の行動は，つねにこう，社会とこう，不適応な行動をしているんじゃないかっていうのはけっきょく，自分自身が，そう現実以上にそう思いこんでいたような気がするんです。――それがぼく，あくまでも一人のただ，考えであって，客観的にどう評価されるかそりゃあ判りませんけど――なんかそんな気がするんです」

彼はここに到ってついに「非常に危険だ」と思いながらも，敢えて彼独自の生き方を貫いて行って見ようと決心し始める。たとえ世の中に適応できなくても，それは彼にとってかけがえのない自分の生き方であるように思われて来る。この間，カウンセリングは，全く非指示的 non-directive に進められ，カウンセラーの価値観は何一つ示されなかったことを注意したい。彼のこの点への到達は，外から強制されたものでも，また誘導されたものでもない。このような思想は全く彼自身の内部に生成したものであり彼の生き方の選択は彼自身の内的な規準に従ってなされたものである。われわれはここで，われわれがタッチしているのは，Rogers のいうように，自らその価値を実現してゆく，生成する過程としての人間であることを，改めて考えなおさねばならない。

人間疎外とカウンセリング

さて，カウンセリングが真に人間主義の立場に立つならば，それは人間の非人間化に協力するようなものであってはなるまい。むしろそれは，クライエントの自己譲渡からの自己恢復への援助のプロセスであらねばならない。それにはまず何よりもカウンセリングが，独自存在としての人間，また責任存在としての人間の尊重と信頼に立脚し，生成する過程としての人間，すなわちその可能性の発展によって，その価値と尊厳を実現してゆく過程としての人間に関与するような営みであることが必要である。

このような立場に立つとき，カウンセリングはまず第一に，クライエントの外部の基準にクライエントを合わせる，という人間操作的な考えを排除することになる。

先述したようにある派の人々は，しばしばカウンセリングの目標を，クライエントの社会化，または社会的良適応におく。このことはクライエントを，一般に望ましいとされる平均的な社会的基準に合わせることを意味し，カウンセラーがそれを意図すると否とにかかわらずカウンセラーに多かれ少なかれ人間操作の姿勢をとらせることになろう。そしてこのような構えは，現代的状況の下では，先にのべたように多分に人間の「平均化」「商品化」に助力する結果を産む危険をはらむ。

他方，社会的コンフォミティーへの同化は，たしかに疎外感から人間を解放するかも知れない。しかし，疎外感からの解放は，疎外からの人間の解放を意味するものではない。われわれは「疎外された世界の範疇では，健康と考えられる人間が，人間主義の立場から見れば重病人だ」という Fromm のことばを重視せねばなるまい。

このように考えるとき，カウンセリングの目標は，クライエントの外部に求められるのではなくて，いわばその内部に求められねばなるまい。上のケースに見たように，この世界の中に彼自身「その他にはない」生き方を発見し，選択する基準はクライエントの内部に求めるほかはない。それは，カウンセリングを通じてクライエントの中に生成し，クライエントの中に組みこまれてゆくものである。指示的立場に立つ人々は，先述のようにカウンセリングが，単に個人の成長のための成長を目指すことに危険を表明するのであるが，これは責任存在としての人間に対する不信の表明に他ならない。たとえ社会からの deviant であったとしても，それが真にその人間の「他にはない」生き方であるならば，人間主義的カウンセリングはそれに寄り添うべきものであろう。「正気でない社会」から逸脱していることが人間として不幸なのでもなく，また無価値なのでもない。

第二にカウンセリングが独自な存在としての人間の独自な生き方に関与するものであるならば，カウンセリング場面の特質は，必然的にクライエント中心 (client-centered) であることを要求されることになる。クライエントは，誰から支配されることもなしに，全く自己の自由と責任とにおいて，自己自身を生きるために価値を選定し，行動を選択する権利を有するはずである。そし

てカウンセリング場面におけるこのような自由と責任の復活の経験が，彼に自分自身が自分の力の主体であり，行為者であることの自覚を呼びもどすであろう。このような再発見による自己同一感のみが，クライエントに自己の価値と尊厳に気ずかせ，自己を受容することを可能にし，外化された自己をとりもどすことに成功せしめることになろう。

クライエント中心ということは，しかしながらクライエントを全く放任するということを意味するものではない。クライエントがその自由と責任とにおいてより効果的に選択や決定を行いうるためには，彼と共にカウンセリング関係を生きて呉れるカウンセラーが必要なのである。すなわち，カウンセラーが，クライエントを一人一人独自な人間として受容し，またクライエントの変動するひとつひとつの断面を，それが表現されるままに受容してゆくことが必要なのである。

また，いわゆる共感的理解，すなわちクライエントの外部の枠組——たとえばカウンセラー自身の枠組——によってではなく，クライエントの内部の枠組によってクライエントを理解してゆくことが必要なのである。このことは独自存在としての，また責任としてのクライエントを尊重し，その生成する過程に寄り添うことを意味するが，このような特殊な，そして純粋な関係をカウンセラーと共に生きることによって，クライエントは次第に自分を愛することができるようになり，それゆえに生産的構えを取りもどすことができるようになると考える。

カウンセリングは，現代社会のもつ構造的矛盾から結果する人間疎外の状況に対してはまことに無力である。それのみかこのような宿命的状況を生きる一人の人間に，当面の安らぎを与えることすらできないかも知れない。しかしカウンセリングは，彼の内的世界の奥深くまで入り込み，かけがえのない彼自身をかけがえなく生かしめるために奉仕する。そしてそれゆえに，彼がその中で生きる世界そのものにも，わずかではあるが，何らかの影響を与えることとなろう。

文　　献

1. 川島武宜 「近代化」の意味「思想」No. 473, 1963.
2. Pappenheim, F., The Alienation of Modern Man, 1959. (邦訳，栗田賢三訳「近代人の疎外」)
3. Fromm, E., The Sane Society, 1955. (邦訳，加藤正明，佐藤隆夫「正気の社会」)
4. Fromm, E., Escape from Freedom, 1941. (邦訳，日高六郎「自由からの逃走」)
5. Hansen, D. A., The Indifferent Intercourse of Counceling and Sociology, J. Couns. Psychol. 1963, 10. 1,
6. Williamson, E. G., A Concept of Counseling., Occupation Vocational Guid. J., 1958. 28. (邦訳「カウンセリングの概念」伊藤博訳編，カウンセリングの基礎　第3章)
7. Rogers, C. R., The place of the persons in the new world of the behavioral Science, Pers. Guid. J. 1961, 39. (邦訳「新しい行動科学における人間の地位」伊藤博訳編，カウンセリングの理論　第9章)
8. Rogers, C. R., Persons or Scionce? A Philosophical Question, Amer. Psychologist, 1955, 10. (邦訳「人間か科学か」——哲学的問題，伊藤博訳編　上掲書　第4章)
9. Walker, D. E. and Peiffer, H. C., The Goal of Counseling, J. Couns. Psycgol, 1957. 4. (邦訳「カウンセリングの目標」伊藤博訳編，上掲書第10章)
10. 山崎恒夫　Acceptance の意義についての理念的考察 慶応義塾大学 学生相談室紀要 Vol. 1, 1963.
11. 友田不二男　大学生とのカウンセリングカウンセリング事例 No. 4.　人間開発センター